

## 「解体新書」扉絵を画かせた人物をめぐって

板野 俊文

香川大学医学部 脳神経生物学

「解体新書」の扉絵が、クルムスの原著でオランダ語訳本のいわゆる「ターヘル アナトミア」の扉絵と異なることは、よく知られている。また、内外を問わず、多くの研究者によって、謎解きが行われたのであるが、「ワルエルダの解剖書」からとられたことまでは分かっているが、すべてが解決したわけではない。

一方、解体新書の原図を写したのは小田野直武であるが、直武が自分で考えて、扉絵を画きなおしたとは、考えられない。何故なら直武はほとんどオランダ語ができなかったし、大体、その当時、オランダ語の本を持っていたとは思えない。

「解体新書」が多くの人々の興味を引き、かつ一大ベストセラーとなったのは、その図版にあるといっても過言ではない。さらに、我々は「解体新書」といえば、あのアダムとイブが裸で立っている図を思い浮かべる。それほどインパクトがあり、解体新書の内容そのものは知らなくても、これこそが、解体新書と思っているのがこの扉絵であろう。この面からしても扉絵を画かせた人物を考えることも意義ある事であろう。

簡単に考えれば、著者である杉田玄白と考えられるが、これは、否定できる多くの証拠がある。

では一体誰が、直武に指示し、あの扉絵を画かせたのか？ 今回の発表では、それを考えていくことにする。

まず行った作業は、一番考えやすい杉田玄白や前野蘭化の可能性をいくつかの理由で否定した。

次に校として翻訳にあった中川淳庵、参と書かれている石川玄常、関とかかれている桂川甫周の可能性も排除できた。

当時の関係者で残ったのは平賀源内のみである。「源内が小田野直武に指示して書かせた」という作業仮説を立て、これを証明しようと試みた。

当時、「ワルエルダの解剖書」が日本にあったことは事実である。でなければ小田野直武がこれを写すことはできない。そこで、「ワルエルダの解剖書」を源内が所有していたか否かを検討した。当時源内が所有していた阿蘭本の目録というべき「物産書目」を元にできうる限りの所蔵本の内容を調べた。また源内の出版した著作に関しても検討を加えた。しかし、彼の蔵書中には「ワルエルダの解剖書」は存在しなかった。

では「ワルエルダの解剖書」はどこにあったのか？ 一番可能性のあるのは、千代田城の中の文庫（後に命名された紅葉山文庫）である。その紅葉山文庫に自由に入れ、かつ、その物を市中に持ち出せたのは「阿蘭陀翻訳御用」の肩書を持つ源内のみということになる。

直接の証明はではないが、現在考えられる最も可能性のある人物こそが平賀源内であろう。

なお、この作業をしている最中に文献検索を行っているとき、他の先生が同様の推論をされていることを見つけた。今回の発表では、他の報告と今回の発表の相違についても述べる。